

一枚の牛肉契約書をめぐる世にも不思議なほんとの話

アメリカが生んだ国民的なユーモア作家マーク・トウエーン(一八三五〜一九一〇)は、若いころ新聞記者を経験しただけあって、事実とフィクションのすれすれを洗い出したような作品が少なくない。そのひとつ「牛肉契約書に現れた大変な事実」は、一枚の契約書が引き起こしたさまざまな運命を描いて、その全体的な悲劇性のなかに奇妙なユーモアが感じられるといった不思議な作品である。

一八六一年十月、南北戦争が始まった年、ニュージャージー州生まれのジョン・ウイelson・マッケンジーという牛肉商が、北軍の猛将ウィリアム・シャーマン將軍と牛肉三十樽、計一万七千ドルの納入を契約する。ところが、この牛肉を届けようとして、マッケンジーは、シャーマン將軍のあとを追ってワシントン↓マナサス↓ナツシユビル↓チャタヌガ↓アトランタ↓エルサレム↓アメリカ中西部と、途方もない追っかけごっこをしなければならなくなり、やつとのことです。シャーマン將軍の司令部のすぐ近くまでたどり着いたところでインディアンの襲撃に遭い、あえなく殺されてしまう。もちろんインディアンはその牛肉を奪い去った。

しかし、この牛肉契約書は、遺言によって息子のバーソロミュー・ウイelsonに譲渡

ミート de meet

小麦粉でサクサク触感

肉を油で炒める場合、肉の表面に小麦粉を薄くまがします。これは材料に早く焼き色をつけることと、粉で膜を作り、肉汁の流出をさけるためです。フライでは粉をまがした上に、溶き卵とパン粉をつけます。これは油が染み込まないようになり、また材料から水分が出ないように壁の役目をするためです。さらにパン粉の香ばしいにおいがついてサクサクした歯触りも楽しめます。

され、以後、少なくとも十二人以上の人手を転々とするのだが、不思議なことに、この契約書を手にした人は首尾よく換金できないうちにつきつきと死んでいくのだった。その結果として、契約書は、ある親戚の者の手を経てマーク・トゥエーンの手になるところとなる。そして彼は、この代金を政府から取り立てるべく、新聞記者特有のねばり強さで徹底挑戦するのである。まずアメリカ大統領から始めて、国務大臣、海軍大臣、内務長官、郵便局長、農林省、下院議長、特許局局长、大蔵大臣と、関係のありそうな

大物につきつきと体当たりし、そのたびにうまく「フライ返し」をされ、ついに財務省にたどり着く。が、ここでも第一会計検査官、第二、第三検査官、コンビーフ係、第六検査官、請求権部、契約不履行部、推測航法部、雑権部、推定勘定部と、見事なタライ回しのくり返しに会い、結局、この契約書は、近く結婚するという若い書記にプレゼントしてしまう。ところが、この書記がまた、間もなく死んでしまうという——そんな、なんとも不思議な話なのである。